

資料館だより

Vol.42 No.2 (通巻215号)

2017.9.25(年4回発行)

江戸時代に流通した
貨幣の一例

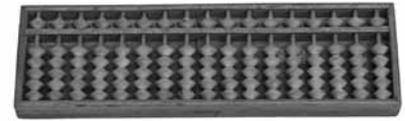
錢



銀貨

(寛永通宝) (嘉永一朱銀)
φ2.5cm 約1.4×0.9cm

錢枡



算盤 (上:江戸末期、下:昭和初期)



錢箱



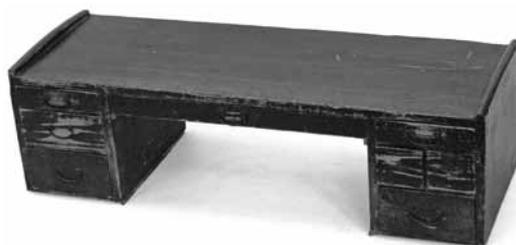
判取帳



判取帳に記録された授受



懸硯



帳場机



帳箱

寄贈資料の中から 帳場に関するもの

今回は、資料の中から帳場に関するものを紹介します。帳場とは、商家などで金銭の勘定や帳付けをする会計場のことです。帳場では金銭や重要書類を扱うため、限られた人しか立ち入りが許されませんでした。

錢枡は硬貨を計量する道具です。硬貨の大きさに合わせて枠で仕切られており、適当な数の硬貨を入れてゆすることで一定の量を早く数えることができます。写真の資料は、江戸時代に流通した小型の金貨や銀貨を計るものです。右の資料の枡目はとても細かく、目の大きさは縦1.3cm、横0.8cmです。左の資料は天保5年(1834)のもので、銀二両を計ることができます。

錢箱は主に江戸時代に用いられたもので、錢を一時保管する箱です。厚い板で頑丈につくられており、蓋に錠を掛け、上部にあけられた口から錢を入れます。

懸硯は持ち運びのできる硯箱で、筆記用具のほかに収納ができるよう、引出しがいくつかついています。

写真のものは江戸時代中期以降に広く用いられた型で、上段が硯箱になっており、蓋を開けて使います。

帳場机は台に脚のついた文机が多く用いられましたが、後に写真のような引出し付きのものができました。

帳箱は帳場に置いて帳面などを入れておくもので、上の蓋を閉めると机の代わりにもなります。右上部は硯箱になっており、汚れが目立たないように中が黒く塗られています。

帳簿類は取引の状況を記録するもので、大福帳、売掛帳や買掛帳など何種類もあり、判取帳は、お金や品物を受け取った証拠として判を押してもらった帳面です。

算盤は、金額や数量などを計算する時に使われます。室町時代末頃に中国から伝わり、当初は五珠が2つ、一珠が5つのものが用いられましたが、江戸時代に算盤の普及に伴って枠の大きさや珠の形状が変化し、後に計算を迅速に行うため珠の数が減っていきました。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

個人で行う漁 コショウバイ (1) ゴチ網

12月の半ばから3月頃まで内浦地区では西から強い風が吹きます。この期間は長宝組として漁に出ても、魚が捕れる見込みが少ないため、原則として網組での漁を行いません。ただし、魚の群れがやってくれば別で、正月3日から長宝組として巾着網でイワシを捕りに出かけたこともありました。1月からの一ヶ月ぐらいは長宝組の漁師を集めて春から使うことになる網の準備を行います。ミゴナ(稲の穂先)で作られた縄を購入してマカセ網のナアミ(垣網)を編み、その網を防腐のために寒潮に浸けてアク抜きをしました。それ以外の期間は個人の判断により、みかんの収穫を行ったり、コショウバイと呼ばれた個人漁を行います。コショウバイには様々な漁がありますが、今号から金指さんがコショウバイで行っていた2種類の網漁を取り上げます。

・ゴチ網

3月頃から4月にかけてだんだん暖かくなってくると、ネ(海底の岩礁)にオブ(海藻)が生えてきます。その頃にはタイやバショウイカ(アオリイカ)が回遊してくるようになり、小海で昔から行われている網漁であるゴチ網の出番となります。金指さんが操業していた当時、小海では5組ほどゴチ網で漁をしていましたが、沼津市の他の地域ではあまり行われていない漁だったようです。

ゴチ網がいつ頃から始まった漁かは分かっていませんが、明治時代後期にはすでにゴチ網という漁法が行われていたようです⁽¹⁾。昭和30年頃になると、3月末頃にやってくるサバを狙って、巾着網による漁を長宝組で始めるようになり、ゴチ網とは漁期が重なってしまうため、オオショウバイ(網組での漁)を優先して金指さんはゴチ網による漁を行わなくなりました。

ゴチ網はオアミの両脇にナアミ(垣網)がつく構造になります。トイシキやマカセ網のオアミは魚捕りとなるフクロ(袋網)とナアミを繋ぐための網でしたが、ゴチ網ではフクロは付けられておらず、オアミの中央の15間⁽²⁾(約23m)ぐらいの部分が魚捕りとなります。網目はナアミが1尺(約30cm)ぐらいで、オアミのナアミとの繋ぎ目付近では3寸5分(約11cm)ぐらいとなり、オアミの魚捕りでは14節⁽³⁾(網目の大きさは約1cm)となります。網の丈(深さ)は20尋⁽⁴⁾(約30m)ぐらいで、水深が浅い場所でもこの網で漁を行います。

ゴチ網を簡単に説明すると、2艘の船で行う2艘巻の巾着網のような漁法になります。漁の経験者が船頭

としてリーダーとなり、1艘に4名ほどの漁師が乗り込み操業を行います。沖から岸の方へ向かって網を曳いていき、岸近くのネに網を立ち回すと、各船が持つナアミをしめ、オアミの裾に付けられたカンツナ(環網)を括り、網を揚げていきます。ネとネの間を狙って行うため、オブがない冬の時期は、網がネにかかって傷めてしまい行うことができません。ゴチ網に適した場所は大体決まっており、大瀬から内浦にかけて30か所ぐらいの漁場がありました。漁を行う場所は早い者勝ちです。他の漁師のゴチ網と競合してしまうため、他の漁師がゴチ網を行った後だと獲物が獲れないということもしばしばあります。漁師はどこで何が獲れたかは一切口にしないので、港に帰って来た他の漁師の漁獲を見ながら、その動向を絶えず気にかけていました。

ゴチ網は夜中に行われる漁で、夕方、太陽が落ちると漁師が集まり漁場へと向かい、オオボシ(明けの明星)が上がるまで行います。1回の網揚げは30分ぐらいかかると、一晩で15回ぐらいの網揚げを行います。満月の頃は夜中でも明るいため、あまり漁獲が良くないことから、この間は漁を行いません。バショウイカを狙って昼間にゴチ網を行うことがあり、このゴチ網を昼ゴチと呼んでいました。

ゴチ網を行っていた当時、沼津の魚市場はありましたが、近隣の港には市場が少なかった頃で、夜に捕った魚は静浦地区のボテー(魚屋)が直接買いに来ました。昼間に捕った魚であれば、静浦地区の馬込で開かれた夕市場に持って行きました。

ゴチ網が行われる時期はまだまだ寒く、網揚げでは袖口など着物が濡れて辛い思いをしながら漁を行っていました。また、一晩中行う漁のため、眠気との戦いでもあり、ゴチ網は漁師泣かせの漁でした。

(1) 沼津市歴史民俗資料館編『沼津内浦の民俗』P32

(2) 漁師が使う1間=5尺で約1.5m

(3) 節は5寸(約15cm)の間にある網の結び目の数

(4) 漁師が使う1尋=5尺で約1.5m

(話:金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住)

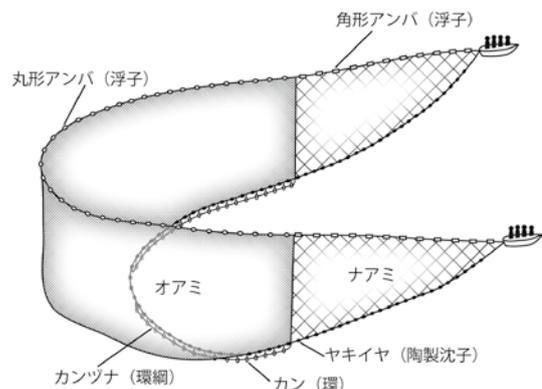


図1:ゴチ網

地図から見た沼津②「湊新田と船溜り」

加藤 雅功

前回は文化3年(1806)に作成された「本町絵図(その2)」を用いて、主として狩野川右岸の沼津本町の下河原を扱った。今回は触れられなかった事項のほか、より西南部の耕地側に目を向けていきたい。

絵図では「妙覚寺先屋敷」として、下河原街出口(外出口の意)分の野屋敷(農家)が11軒描かれている。

また、沼津本町の浅間神社(神領)や妙覚寺・妙海寺・西光寺・永明寺などの土地所有が一部で確認されるが、現在でも寺院の所有地は分散して存在する。

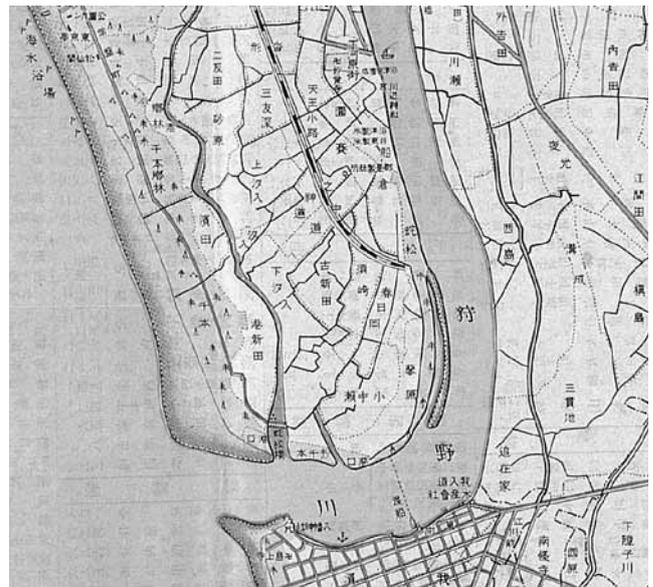
さらに耕作道沿いには小さな塚が4つ見られる。砂礫からなる畑地では、「塞ノ神道」の塞ノ神の藪から入った裏手に年貢免除の除地(現塞神社の地)がある。その西隣には4か所の湧水(湧き間)と不整形な窪地があり、排水不良地の神領や下々田の湿田が広がる。

潮除堤と湊新田 本町絵図では南側の湊新田や西側の千本郷林寄りが、惜しむらくは一部を残して欠けている。塞ノ神道が観音川に架かる橋の右手前は字汐入で、その先の浜道の右手が字浜田、左手が字港新田であった。60数年前に私が蛙を取り、狐を見た、最後に残った低湿な水田で、周囲より2m近く低かった。

絵図は水帳(検地帳)を元に簡易測量をして作成した精緻な地図である。神領(浅間神社領)や下々田の広がる排水不良地にある「潮除堤」は高潮除けの土手や松・藪で描かれ、近世の新田開発による「湊新田」の成立に深く関わる。字古新田から低い部分は干拓地で、長く荒蕪地であった。小字名の汐入や上汐入・下汐入が示すように、日常的な干満に限らず、海水の浸入が水田の塩害に直結し、農地の荒廃が目立っていた。



本町絵図西南部分(文化3年)



沼津市全図(大正15年)

なお、絵図の字船倉から須崎の東側、南北の帯状の水田(永明寺領)は狩野川の旧流路で、隣接した畑(永明寺領)は中江川に因む「江川新田」である。近世前期の度重なる洪水による荒蕪地の新田開発は、絵図で欠けた南側の蓼原・小中瀬にも及び、災害に絡む作柄の不安定な土地の見取場であった。字蛇松の南側の蓼原は畑地で、天保8年(1837)の絵図では、見取場が「新田」となっている。なお、川寄りに春日丘(後の春日岡)があり、混同の激しい中州(中嶋洲)でなく、現在の山神社付近の高まりを指したと思われる。

湊新田(港新田)や字下汐入付近の「港口新田」の呼称が示すように、河口寄りの低地には、より規模の大きな船溜りの存在が確実視される。排水不良地の新田開発以前の状況は、字千本港口の砂礫州側から、洪水時に観音川側に逆流して形成した「逆三角州」の地形とその低地(沼地)が推定される。かつて河口港の機能が河口部の沼沢地側にあり、沼津の名称とともに実質的な沼津湊の発端地点となったと言えよう。河口部の閉塞しやすさゆえに港湾機能は優れず、その後、牛臥や江浦側との補完関係が構築されたのであろう。

一般に「沼津」の地名は、浮島沼側と結びつけて語られることが多い。しかし、河港の「河津」(カワヅ・コーヅ)が古くに用いられ、沼地に広がる湊の沼津というよりも「河津」が「沼津」に誤記されて定着したとの仮説もかつて検討したことがある。門池も古くにコーヅ池(上津池)であったからという。ただし、鎌倉時代初頭に成立していた溜め池はカミト池(上津池)で、後に訛ってカド池となった方が理解しやすい。

帆船と船溜り 狩野川は干潮と満潮との水位差がある「感潮河川」で、近世の帆船の時代にあっては、沼津の河口港としての機能が良好とは決して言えなかった。古くに下流部を「沼津川」とも呼んだ狩野川は、

さらに沼地部分も洪水のたびに砂礫による埋積が進み、弁財船、俗に千石船などの帆船が帆を下ろして係留する「船溜り」も確保しづらかった。

最河口部でも対岸の我入道側の「川口」付近で、八幡神社・不動堂のある小丘の不動岩（不動山・男山）の水際、湾入部分でわずかに確保できる程度であった。

明治・大正期になっても、水深が浅くて船の吃水が保てない深刻な状況は続き、やがて浚渫が進められる。また、狩野川口（河口）沖では古くから座礁しやすく、風波が強い時には度々「打船（船の難破）」が発生した。

なお、戦前にかけて、河道改修した観音川（子持川）の末流が現在の内港側に注いでおり、その旧河口部の蛇松橋付近には「船溜り」が小規模ながらも存在した。

江戸後期に記された『駿河記』の挿絵には、砂礫州からなる千本松原の手前に、帆をたたんだ船が数艘描

れており、より係留規模が大きかったことが推測される。また、字千本港口の御林が狩野川沿いに飛び地で存在し、港の片鱗を残していた。

一方、口野の塩久津も含めて、江浦湾に好錨地があり、口野からは田方側に、また江浦からは陸路で多比や獅子浜・志下方面に荷物が輸送された。中でも江浦と沼津の関係は特異であった。廻船で江浦に入津後、荷揚げされた積荷の小分けがなされ、捌かれた荷物はより小型の帆船で沼津に運ばざるを得なかった。明治期の蛇松線敷設では、江浦から舢舨で資材を運び、「官材堀」を経て陸揚げしている。

現在では、蛇松線の跡地が蛇松緑道となり、また高潮除けの堤防が内港寄りに構築され、外港と内港の間には津波除けの防潮水門も整備されて、展望施設を兼ねた「びゅうお」が観光客に好評を博している。

資料館からのお知らせ

体験学習「昔の道具使ってみよう」 を開催しました



石臼による粉ひき体験の様子

8月12日（土）に体験学習「昔の道具を使ってみよう」を玄関ピロティを使って開催しました。

石臼を使って米や大豆を挽いた米粉や黄粉づくり、火打ち金と火打石を使って火花を出し、付け木につける火起し、竿ばかりと台ばかりを使った昔の重さを量る方法を体験しました。

石臼を回すのには思ったより力が必要でした。火起しでは、火花を出すコツがなかなかつかめななど苦戦しましたが、昔の人の知恵や工夫、そしてその苦勞に触れることができました。

体験コーナーを設置しました

夏休み期間中の土・日曜日に随時、玄関ピロティに

火起しの体験コーナーを設け、舞錐や火打石を使った火起しを体験しました。今年は暑い日が続いたせいか、いつもになく、早く火種を作ることができました。汗びっしょりになりながらも果敢に挑戦していました。麻屑や紙に火が着き、炎が上がると「やったー」の聲が上がりました。今後はもっと体験の機会を増やすように努めたいと思います。



体験コーナーの火起しの様子

沼津市歴史民俗資料館だより

2017. 9. 25 発行 Vol. 42 No. 2 (通巻215号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp